# あの子

ゆきの

# 冬

わたしが、初めてあの子に出会ったのは、
冷たい粉雪の舞う、高校の推薦入試の日だった。

理数科の試験は、面接のみ。
合否は内申点と面接で判定される。

あの日、受験番号がわたしのすぐ前だった彼女は、
わたしの顔を見て、軽く会釈をした後、
「よかった。女子がいて」と、言った。

４０人１クラスの理数科は、毎年女子が極端に少ない。
わたし自身も、ひとりじゃなかったことに安堵した。

あの時のわたしは、本当に緊張していて、
「落ちたらどうしよ……」と何度も呟いていた。
「定員割れだし、きっと受かるって！」と彼女は笑った。

それから、ポケットからミニホッカイロを出し、
「あったまれば、少し落ち着くかも」と、言って、
わたしの手に握らせてくれた。

理数科の推薦枠は１２名。
その年の受験生は９名。

しかし、合格者は７名だった。

後日、彼女の名前はもちろん、
わたしの名も、合格者として発表された。

春になれば、また、あの子に会える———
わたしは４月が待ち遠しかった。

## 高校１・２年の頃

高校でのわたしは、「異端」であった。
元々そうなりたくて受験した高校だった。

中学時代のわたしの成績を知っている人が、いないところがよかった。

勉強がしたくて進学校に行ったわけではない。
わたしはもう、親の期待に疲れていて、
勉強をサボるための高校を選んだのだった。

好きな本を読んで、好きな小説を書いていたかった。

あの子はいつも、わたしが好んで読んでいた、
ブルーバックスやハードSFに興味を示した。

とある医学サスペンスの中で論じられた、
「生命倫理」の問題について、放課後遅くまでディベートした。

中でも、わたしたちがよく話題にしたのは、
「生命」というものの定義、そして、
「生命」の始まりと終わりをどのように認識するか、であった。

その頃、TVでよく取り沙汰された、「脳死」「尊厳死」の問題。

わたしたちは、「生命」としての「終焉」と、
「生物」としての「死」が果たしてイコールであるかどうか、
という明確な答えのないテーマについて真剣に考えたりした。

「人間の命」について、彼女は時に、悲しいほど冷酷な意見を口にした。
そして、
「この判断は間違っているかもしれない、だが、それが必要な場合もある」
と結んだ。
彼女は医学部を志望していて、すでに医師としての片鱗を見せていたのだ。

わたしは一度、彼女にどうして医者になりたいのかと訊ねたことがある。

彼女は、少し考えて、「医師免許があれば、出来る事が広がるから」と答えた。

## 高校３年・七夕

受験生になった頃、あの子を含む友人達３～４人で、
街の図書館へ行って、勉強する時間が多くなった。

休日は、必ずといっていいほど自然に集まっていた。

七夕が近い、初夏のことだった。
図書館のロビーに笹竹が飾られていて、
「ご自由に短冊を書いて下げてください」と、
折り紙が長方形に切って箱に入れられていた。

「お願いごと」なんて書くのが、
恥ずかしい年頃の友人達を誘って、
わたしは、率先して短冊をもらいに行った。

ある友人は、「獣医さんになりたい」と素直な夢を書き、
またある友人は、「祈国立大現役合格」と真面目に書いた。
わたしは、叶いそうもない願いごとのほうが面白いと言って、
「SF作家になりたい」と書いた。友人達は、頑張れ！、と笑った。

そして、あの子の書いた短冊はこうであった。

「世界人類が平和でありますように」

叶いそうもない、途方もない願いだった。
わたしは、とても悲しくなった。
彼女は、「自分の願いはいい。自分で頑張る。」と言うのだ。

彼女の赤い、短冊は、彼女のためのものであったはずなのに。

自分がない、のではない。自分の幸せなんてどうでもいいと思っているのだ。
彼女は本気で、「みんなが笑っていられますように」と願う子だった。
そのために、自分が笑えなくても、そんなちっぽけなことは重要でないのだ。

あの子は、そんな子だった。

わたしとあの子には、月経痛がひどい、という共通点があった。
鎮痛剤を分け合ったり、一緒に体育を見学したりしていた。

よく、子供を産めば月経痛なんて軽くなる。
とは言われていたものの、何となく心配で、
「一度くらいは婦人科に行くべきかな？」などと話していた。

先に、婦人科に行ったのは、わたしの方だったと思う。
問診の後は鎮痛剤が処方されただけだった。
あっけなかった、拍子抜けした、と、わたしが話した後、
彼女も、婦人科に行く決意をしたようだった。

ひどい月経痛、「月経困難症」は、大きく２つに分けられ、
「機能的月経困難症」と「器質的月経困難症」と呼ばれる。

わたしの場合は前者の「機能的月経困難症」と診断され、
子宮自体には問題はなく、言ってみれば、「体質」と片付けられた。

しかし、彼女の場合はより深刻な後者であった。
「器質的月経困難症」は子宮に関する疾患が痛みの原因である。
精密検査の結果、彼女は「子宮発育不全」ということが分かった。

彼女の生殖器官の発育は、初潮を迎えた頃の状態で止まっており、
その原因はホルモンが十分に分泌されていないか、もしくは、
ホルモンの受容体に何かしらの欠陥がある、と説明されたそうだ。

女性ホルモンが足りないだけなら、ホルモン注射などで、
子宮の発育を促進させることが出来る可能性も高い。
だが、ホルモンを受け取る側に器質的な問題があると、
治療は困難を極めるという。

妊娠することは、出来ないかもしれない、
その前に膣すら未発達だと分かった彼女には、
男性を受け入れることも出来ないかの知れない。

他人事のように、そうなってるみたいね、と、
彼女は、わたしに話した。口調とは裏腹に、彼女の目は赤かった。

なぜ、彼女だけが……。
そんな想いばかりが溢れた。

偽善ではなく、本当に、
代わってあげられるものなら代わってあげたかった。
わたしは、子供は欲しくなかったから。
でも、それを口に出したら、彼女は悲しむと思った。
何も、言えなかった。

その夜、おそらく初めて、わたしは、神に祈った。
「あの子に降りかかる試練より、
　もっと大きな幸せがあの子を包みますように」と。

わたしは、あの子が「好き」だったのかも知れない……。

## ４度目の冬

あの子は、地元の大学の内部推薦枠から落ち、
別の国立大の推薦試験を受けることになった。

地元の医学部を志望した子は秀才であったから仕方がない。
一方、彼女は、天才だったから。
彼女なら、一般試験でも二次試験でも国立医学部に合格するだろう。
しかし、秀才の子は、内部推薦でないと落ちる可能性がある。

先生方の判断はおそらくこうだったと予想された。

彼女は、全く動じずに勉強を重ね、国立の医学部に推薦で合格した。

## あれから……

その後、あの子は医学部を卒業して多くの論文を発表し、
眼科医の権威に登りつめた。各地で講演会の講師に招かれていた。

大学を精神疾患で中退したわたしにとって、
彼女は、眩しすぎるほど活躍していた。

ひとつだけ、わたしが気がかりなことは、
「あの子は、今、幸せだろうか」
ということだけである。

きっと、あの子は、こう答えるだろう。
「たくさんの人に喜びを与えられることが、私の幸せだ」
と……。

# あの子

http://p.booklog.jp/book/34408

著者：ゆきの
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yukino0705/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/34408

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/34408

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

表紙素材提供：　Mellow　様

http://www14.ocn.ne.jp/~aria/